

平成20年度異常気象分析検討会（定例会）での検討結果の概要

～ 2008/09年冬の日本の天候と循環場の特徴について ～

平成20年度異常気象分析検討会（定例会）において、2008/09年冬の日本の天候と循環場の特徴についての検討が行われました。検討結果の概要は、以下の通りです。

【日本の天候の特徴】

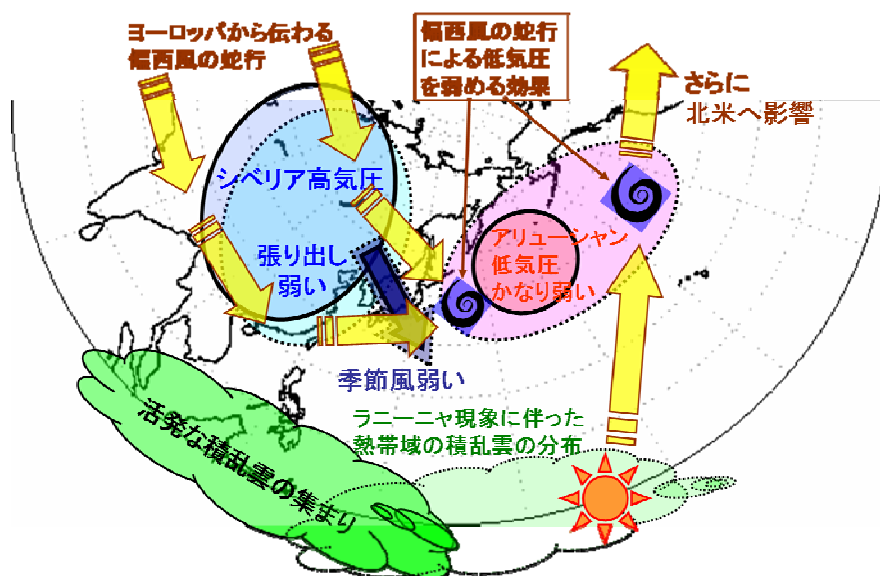
2月22日現在の今冬の平均気温は、北日本と東日本において、1946/47年冬の統計開始以降それぞれ第3位と第2位タイの高い記録となっており、日本海側の降雪量もかなり少なくなっている。なお、北・東日本でラニーニャ現象発生時に暖冬となったのは、過去の統計で全事例中1～2割だった。

【大気の流れの特徴等】

太平洋赤道域の対流活動は、ラニーニャ現象の影響を受け、日付変更線付近で不活発だった。アリューシャン低気圧の勢力が太平洋全域で平年と比べてかなり弱く、シベリア高気圧の張り出しも弱かった。このため、日本付近では冬型の気圧配置が平年より弱く、寒気の南下しにくい大気の流れとなった。このことが、顕著な高温をもたらした直接的な要因である。

ラニーニャ現象が発生している冬に、日本の東海上で強まる傾向のあるアリューシャン低気圧が、今冬は弱かった要因として、ヨーロッパから伝わる南アジア経由およびシベリア経由の偏西風の蛇行が、日本の東海上で低気圧を弱める方向に影響したことが考えられる。

スペイン周辺の低温、東南アジアや南米北部および地中海周辺の多雨、アルゼンチン北部の少雨など、世界的にはラニーニャ現象の影響と見られる天候が現れたが、上述の要因により日本の天候への影響は現れなかった。



2008/09年冬の北・東日本に顕著な高温をもたらした大気の流れの特徴の概念図

実線が2008/09年冬の状況、点線が平年の状態を示す。

【本件に関する問い合わせ先】

気象庁地球環境・海洋部気候情報課 代表：03-3212-8341（内線3158）

異常気象分析検討会委員一覧

やまざきこうじ
山崎孝治 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

いわさきとしき
岩崎俊樹 東北大学大学院理学研究科教授

やまがたとしお
山形俊男 東京大学大学院理学系研究科副研究科長・教授

きもとまさひで
◎木本昌秀 東京大学気候システム研究センター副センター長・教授

なかむら ひさし
○中村 尚 東京大学大学院理学系研究科准教授

やすなりてつぞう
安成哲三 名古屋大学地球水循環研究センター教授

むこうがわ ひとし
向川 均 京都大学防災研究所教授

ひろおかとしひこ
廣岡俊彦 九州大学大学院理学研究院教授

きとうあきお
鬼頭昭雄 気象研究所気候研究部長

お せ ともあき
尾瀬智昭 気象研究所気候研究部第二研究室長

(◎：会長、○：会長代理)